

本格ミステリの歴史と魅力を学ぶ

～高校生のための本格ミステリ入門～

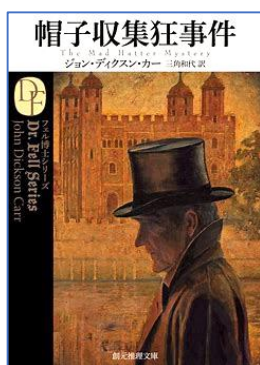
大村 拓

皆さんこんにちは。本日、お話しをさせていただく大村拓と申します。はじめに私の読書体験を使って、自己紹介をします。

アガサ・クリスティーの『アクロイド殺し』(早川書房)は、私がミステリ好きになる入り口になった本です。小学校6年生の時にこれを読んでびっくりしました。ネタバレらしはしないというのがルールですから言いませんが、誰かが教えてしまうかもしれませんから、皆さんも早めに読んだほうがいいと思います。

中学校に行ってから、『帽子収集狂事件』(東京創元社)に出会って、それからは、もうカーを読みたい読みたい。ジョン・ディクソン・カーにはまりました。私にとって神様みたいな作家です。とにかくこの作家の作品は、マニアが好み、はまり込むともう泥沼にはまるようなタイプの作家です。不可能犯罪と言っていて、できたはずがないのになぜかできちゃったというのを得意とする作家です。この本も面白い物語で、広い意味で不可能犯罪が出てきます。一般に不可能犯罪の典型は密室殺人ですね。このディクソン・カーについては後でじっくり説明します。

高校時代は横溝正史にはまりました。日本のミステリのパイオニアのような作家です。横溝正史を読んだことはあるでしょう。でも少ないのですね。私の高校の頃、横溝正史のブームが来まして、『犬神家の一族』(角川書店)というのが角川映画になりました。見たことないですか。池の中から両足が突き出ているという映画でね、大ブームになりました。



横溝正史がめちゃくちゃ売れたのですね。ベストセラーになった横溝正史の本は、この時点で書かれてから20年以上たっている本ですからね、ちょっと考えられない。今売れている本って、今書いている作家たちの本でしょ。それが20年後のブームだから、何か当時の日本人の心をギュッとつかむものがあったのでしょうね。同時に彼の作品はテレビ化も続々とされました。私は高校の図書館で『八つ墓村』(角川書店)を読んで、そのあまりの語り口のすごさにはまりました。

大学時代は赤川次郎を好んで読みました。まだ現役で書いています。めちゃくちゃたくさん書いている作家で、やっぱりうまいです。とにかく軽妙に読ませる。本日お話しする本格ミステリからいうと評価できない部分もあるのですが。

その後、大学院を出てから高校の教員になりました。社会科の教員でした。最初は幕張西、今は幕張総合高校に統合されてしまいました。それからその次が市川工業、そして船橋旭、これも今は船橋啓明高校に統合されてしまいました。次がここの習志野にきて最後は松戸六実で合計36年間教員をやりました。

その間1994年、日本最古のミステリファンクラブ「SRの会」に入会しました。「SRの会」はミステリ愛好家の会で、もう今年で70周年です。ミステリの鬼といわれる人たちが集まっていて、作家からも恐れられている団体で



大村拓氏。T シャツには、12時方向にアガサ・クリスティー、3時にディクソン・カー、9時にエラリー・クイーンが。

す。そこに入ってから30年近くになります。

これもね「SRの会」で作ったTシャツ。三大ミステリ作家を並べてあります。毎月1回東京で集まって、ああでもないこうでもないとやるのが楽しいです。入会資格はありませんので誰でもミステリが好きだというなら入れます。皆さんもぜひ入会してください。ほんと、マニアックな方ばかりなのですが、話を聞いているだけでも楽しいですよ。私もその中で活動しながらずっとやってきたわけです。

この習志野高校に勤務していた時に司書の菊地さんが、私がミステリ好きだということを見抜きまして、図書館のホームページに連載の文章を書いてくれないかという話になって、じゃあやりますかってことに。今でも習志野高校のホームページにアップされている「高校生のための本格ミステリ入門」を3年がかりで書きました。現在も、ネットで全部読めます。その後、形にしたいというので冊子の形にしてもらいました。国立国会図書館へも納本してあります。原稿用紙で300枚以上なので普通の本で一冊以上になります。高校生に向けて本格ミステリのガイドをするつもりで書きました。それまでミステリ入門の本はいくらでもありましたが、「本格ミステリ入門」というものはなかったの、業界からは結構評価をいただきました。老舗ミステリ専門出版社の「東京創元社」の元社長さんがどんな活動をしているのですかって興味を持たれて、わざわざ習志野高校へ見学にも来てくれました。

今年(2022年)の3月で定年退職をいたしました。現在の私はユーチューバーです。ミステリを読むほか、私のもう一つの趣味はクラシックギターなのですが、「jdctaku」というチャンネル名で動画を挙げています。“jdc”っていうのは彼です。ジョン・ディクスン・カーです。そのjdcに私の名前のtaku(拓)をくっつけて、これをチャンネル名にしております。よかったら聴いてやってくださいね。チャンネル登録してください。これってお金のかからない趣味です。ミステリとのコラボ企画で「ミステリーをギターで」というシリーズもあげてまして、ミステリに関連した音楽をギターで弾くという企画は誰もやっていない画期的なことだと思っています。第一回目には映画

「犬神家の一族」のテーマ曲をあげました。そんな悠々自適の老後生活をしています。楽しく暮らしています。

私は、本は基本的に図書館で借りるのですよ。なのでこちらもお金がかかりません。図書館はありがたいです。図書館は、無職で収入のない人がちゃんと教養とか知識とかでダメージを受けないようにしようという社会のシステムなのです。読みたい本は全て読めますから、私も充実した幸せな人生を歩んで行けるということですね。今日は図書館企画なのでね、図書館をよいしょしておきますけど、お金を使わなくても充分幸せなのは、図書館のおかげです。本が好きだからですね。幸せです。図書委員の皆さんも本が好きだからここに居るだろうから幸せだと思いますね。

ミステリとは何か？

他にも様々な名称＝ミステリー、
ミステリー小説、推理小説、探偵小説

今日は、ミステリがどれだけ楽しいかということをお話したいと思いますが、私の一番好きなミステリのジャンルが「本格ミステリ」です。わからない人もいるかもしれません。話していきましょう。

一般のミステリファンは、Mystery と綴りますから、「ミステリー」と読みます。しかし、我々マニアはだいたい「ミステリ」と引っ張らないことが多い。本格ミステリの歴史と魅力を学ぶ「高校生のための本格ミステリ入門」というようにね。ですから本日も私は、「ミステリ」といいます。これでお話をしていきます。

一般にいうミステリーとは幅広いもので、ホラー話とかお化け話もミステリーっていいいます。ミステリー映画とかミステリー漫画とか色々なものもありますね。でも「ミステリ」とただそれだけいったら原点は小説で、私が言うときも小説のことです。じゃあ日本語にしたらどうなのかなっていうと、実は二つのメジャーな言い方があって「探偵小説」とか「推理小説」といいます。よくいわれるのは探偵小説の「偵」という字が戦後アメリカのGHQから使用頻度の低い漢字はやめろという話になった時、使用禁止になっちゃったのです。使える漢字の限定で「探てい小説」と

書かなくてはいけなくなりました。それでは読みづらいというので「推理小説」はどうだろうかということになりました。そうするとちょっとニュアンスが変わっちゃったのですね。愛好家の中にはわざと探偵小説って言いたがる人もいるし、私も推理小説と聞くとスタイリッシュな感じがして違和感があります。探偵小説と聞くとドロドロした感じがしますし、古臭い感じもします。その辺はまあ好みですが、私はミステリっていう言い方をします。基本同じですけどね。

少年探偵コナンぐらいは、さすがに読んだり見たりはしているでしょう。まあミステリとはああいふものです。探偵が出てきて謎を解きますから。その中で本格ミステリっていうのは特に何なのかということを考えてみましょう。実は本格ミステリを味わうことは、意外と難しいのですよ。

具体例を挙げてお話しします。『貴族探偵』(集英社)という本があります。

作者は麻耶雄嵩(まや ゆたか)です。ものすごくマニアックな本格ミステリ作品なのです。嵐の相葉雅紀君が主演で忠実にドラマ化したのですが、これがめちゃくちゃ悪評でね。相葉君の演技がひどいとか、最低の



できとかいわれたのです。だけどあれは本格ミステリだから普通のドラマの基準で評価されては困るのです。だってこれ主人公は貴族なのです。現代の日本に貴族はおりません。しかもこの貴族は、捜査ばかりでなくすべて使用人にやらせるのです。推理までもやらせるのです。捜査や推理まで使用人にやらせたら、探偵と言えるでしょうか。言えませんね、というぐらい変なことになっています。この話は本格ミステリファンが喜ぶタイプの話で、その意味で本格ミステリドラマとしては結構上手に作ってあったわけです。だけどそんな話、リアリティがないと言われちゃうわけですね。今の世の中に貴族が出てくるドラマなんてリアリティが出るわけがなく、そもそもそういうことを求めてないわけ。ところが普通の人は、話を読んで共感したとか、感動したとか、人

間が書けているとか、今の社会の不安をよく表しているとか、国語的な鑑賞の世界で話します。本格ミステリはそういうところを褒めるものではないのです。褒めるところが違うのだから、それだけでいったらただの駄作ですね。だけど褒めるところを知らずにそれだけ言ったらやっぱり可哀想だなと思いませんか。たとえばね、ミュージカル映画を見に行くと、急に歌い出しておかしいよって感じですかね。だってミュージカルなんだから歌わなきゃ。お約束でしょ。

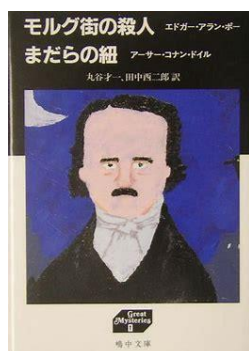
本格ミステリでは理屈に合った行動しかないってことが前提です。たとえば犯人は左利きだということになった時に、この人右利きの人だから犯人じゃないってことですね。ところが右利きだけど「その時たまたま左でやりたくなったからやったんだ」というのではミステリとしては成立しないのです。左利きの人は右、右利きの人は左を使わないのです。そこで、トリックを駆使して「実はこの人は右に見せかけ」として実は本当は左利きだった、ここに手がかりがあるでしょ」というのがミステリの世界なのです。そもそも現実世界ではみんな気分で生きているからね、理詰めじゃない。リアリティがないと言われたらリアリティのない世界なのですね。探偵が謎を解くなんてことはできるわけがないわけです。でも、ミステリの世界ではちゃんとルールを守って書かれています。ルールなどなくせば面白くすることはいくらでもできますよ。だけど、私は評価しない。ドラマで、あるヒロインがいたとします。そこに寄り添う彼氏がいていつも助けてくれているけど、最終回で突然「俺はお前を実は狙っていたんだ、殺すぞー」と言ったとしましょう。だけど、以前に殺すチャンスはあったはず。いや実はあの時は、こういう理由があったから殺せなかったと合理的に説明してくれなきゃ、それはただの都合じゃないですか。これは読者をただ引っ掛けているだけで、ルール違反なのです。だからその辺がきちっとできているものをやっぱり褒めたいです。そういう意味では物差しが違うのです。今日はそういう本格ミステリの物差しってどこにあるのかなということをちょっとレクチャーしますね。

そして午後、文学としては面白くないけど鮎川哲也作「達也が嗤う」(東京創元社『下り“はつかり”』収蔵)という、本格ミステリ界では名作といわれている小品を読んでもらいます。それを読んで犯人と一緒に考えてもらおうと思います。一般的な面白さとは全然違う話で、実につまらない平板でありきたりで感情移入もできないような人々が多々出てきて人殺しが起こるだけの話です。でも、そこを見ちゃだめで、「ここを見るんだぞ、見るところは違うぞ」と、それを本日、皆さんにレクチャーができればとても嬉しいなあと思います。



ミステリの誕生！→ ミステリの発展 エドガー・アラン・ポー、コナン・ドイル、 G・K・チェストン

じゃあそもそも本格ミステリの始まりはどこかという
と、エドガー・アラン・ポーです。ポーはほとんど短編です。特に「モルグ街の殺人」(東京創元社、光文社など)というのが世界のミステリの第1号です。1841年です。異論もあるけど、私もこれから始まったといっていいと思いますね。まさにこの作品には本格ミステリの要素が全部詰まっています。まず冒頭に、意外で非常に興味深い殺人事件が、あるアパートで起こります。お母さんと娘が残酷なやり方で殺されます。しかもそこは鍵がかかって入れないという魅力的な謎が提示され、そして名探偵オーギュスト・デュパンが出てきます。彼が理詰めの推理をします。結果、事件は見事解決します。



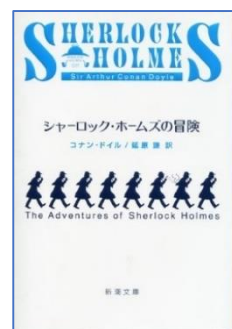
この本の中には、本格ミステリの要素がすべて含まれています。まず「事件が起き、謎があって、捜査をして、推理して、そして最後に解決され、解決した時に意外な犯人の正体も明かされ」ます。これが本

格ミステリというものです。まさにミステリの楽しさが全部揃っているのがこの「モルグ街の殺人」なのです。ただ、あまりにも古いので皆さんが読んで面白いかどうかは疑問で、あえて読めとは言いませんけど、いつかはここに帰って行ってもいいかもしれませんね。

それまでそういう形式の文学はありませんでした。ポーというのは怪奇小説家で、たいがいは最後までおどろおどろしいままの作品を書く作家です。不思議なことがあったら不思議なまま終わる話を書いてた人なのに、この話に限って論理的に合理的に解決させてしまいました。でもそこに新発見があって、そこからどんどん進化発展して行くわけです。

その中でも最も有名なのがこの作家です。シャーロック・ホームズを生んだアーサー・コナン・ドイルです。シャーロック・ホームズは名探偵の代名詞とまでなっている人ですが、読んだことがあるかな。シャーロック・ホームズはドラマにもなっているし、今もこの世界にホームズが活躍する本、シャーロック・ホームズのような探偵が活躍する話など、まあ色々出ています。大概この恰好ですね。鹿撃ち帽でパイプくわえてね。虫眼鏡持って、マント着てね。名探偵のイメージ像というものの基本は、ここから作られています。だからある意味不滅の名探偵ですね。

読むのならやっぱり『シャーロック・ホームズの冒険』(新潮社)。これをお勧めします。これが第1短編集です。長編もあるのですが本格ミステリという物差しで見たらちょっとね、詰めが甘いというかちゃんと推理できていなくて、どちらかというと冒険に主軸を置いている所があります。冒険というのは、ハラハラドキドキ、ヒロインがピンチみたいところが読みどころなのです。最後ホームズが来て見事真犯人を捕まえてくれますから、冒険ミステリの楽しさはあるのですが、本日の本格ミステリということで言えば、ちゃんと推理して犯人探しといった時に甘さがあります。



私がホームズものの中で一番ちゃんと推理していると思うのは、『シャーロック・ホームズの思い出(回想)』(角川書房)という本の最初の「銀星号事件」です。訳のしかたで「銀星号」がそのまま英語で『シルバースタース事件』(新潮社)というふうに訳している本なんかも色々ありますが、おそらくホームズものの中でこれが一番ちゃんと推理していると思います。コナン・ドイルという作家はシャーロック・ホームズが嫌いだね、不本意に売れちゃったからです。ホームズのことを書くのを辞めたい辞めたいと思っていて、実は一回滝に突き落として殺してしまったのです。でも、読者からブーイングが来て結局死んでいなかったということで『シャーロック・ホームズの帰還(生還)』(新潮社)で生き返らすのです。殺したいぐらい好きではなかったのに、その後あまり愛情込めて書いていないのです。だから最初の方が良いです。そこからあとは正直いって、同じタイプのものが多いかなと。こんなこと言ったら、シャーロキアン(熱狂的なシャーロック・ホームズのファン)の人がいたらめっちゃくちゃ怒られますね、彼のファンは世界中にいますからね。



このようにポー、ドイルと発展して行きます。さらにもう一人。シャーロック・ホームズから比べるとずっと知名度は落ちますけども、ミステリの世界だと知らない人がいない名探偵ブラウン神父がいます。作者は、G. K. チェスタトンです。

シャーロック・ホームズは麻薬中毒者だったりして欠点も書かれているけれど、基本威張っている感じで、強気で自信家というイメージです。でもブラウン神父は逆にダメダメな人物で、忘れ物をしちやったり、間違えちやったりして、どっちかという後ろ向きでネガティブな感じです。そんなタイプの名探偵の元祖になっています。このあと、同タイプの名探偵ものが全時代を通して出てきます。

ブラウン神父は、ところがちゃんと見ているので

す。そして、すーっと謎を解くのです。やっぱり鋭いです。何ていうか、それまで読んでいたのがひっくり返っちゃうような結論になることが多いので、本格ミステリファンは好きですね、このチェスタトンのブラウン神父が。

本の題名に必ず「ブラウン神父の〇〇」の形になっていて、5冊あります。特に『ブラウン神父の童心』(東京創元社)は第1冊目ですが、一番名作揃いなので読むとしたらこれから読めばいいです。『ブラウン神父の秘密』(東京創元社)は、シリーズ第4短編集なのですが、この中の「マーン城の喪主」という短編があります。皆さんは、引率の先生に頼んでこれを学校図書館に入れてもらってもいいのではないかと思います。文学的だと思うからです。国語の教科書に載っていてもいいなというレベルですよ。ブラウン神父が謎を解くんだけど謎を解いた時に暴かれるのは、真犯人の正体ではなく読んで自分の心にある偏見だったと、自分自身に突き刺さってくるのです。自分は物事をすごく歪めた自分の物差しで世の中を計っていたということを突きつけられちゃう話です。私は国語の教師に読ませたいミステリの第一位にこれを上げています。もしかして国語の先生はいらっしゃるかな。本格ミステリは、こういうこともできるんですよ。でも、それだけを主軸に置いたら文学のお仕事になってしまってミステリの領分じゃないのですが、本格ミステリという技法を使って人間性とか人間の真実みたいなものをズバッと突き刺すこともできるということを話しておきます。

これが大体1910年代ぐらいまでの状況です。

本格ミステリの黄金時代

アガサ・クリスティー、エラリー・クイーン、
ジョン・ディクスン・カー

1919年に第一次世界大戦は完全に終結します。それから第二次世界大戦が終わる1945年までの

25年間ぐらいを一つの節目と考えて、本格ミステリの「黄金時代」と呼ばれています。その間にアメリカとイギリスで本格ミステリの名作がドカーンと出てきて、これがいわゆる古典といわれるものになりました。この時代の作品は、できれば皆さんに一度は読んでもらいたいと思います。そして学校図書館にも置いてほしいマストアイテムであるわけですね。

この時代に活躍したのがTシャツの三人です。まずは**アガサ・クリスティー**です。「ミステリーの女王」と言われているので、皆さんの学校図書館に一冊もないってところはないんじゃないかと思います。やっぱりメジャーです。この作家は読者の意表を突くサービス精神がすごくあるので、はずれが少ないです。代表名探偵は**エルキュール・ポアロ**です。その一つが初めに話した『**アクロイド殺し**』(=『**アクロイド殺害事件**』)(早川書房)。これが一番いい。日本でも最近では三谷幸喜がドラマ化しています。(『黒井戸殺し』、脚本・三谷幸喜×主演・野村萬斎」のコラボレーションで2018年ドラマ化。)びっくりするようなトリックが使われているので、誰かにネタバレをされないうちに読んでおいて、一回ショックを受けた方がいいと思います。

『そして誰もいなくなった』(早川書房)、タイトルからしてわかると思うけど、十人の人しかいない無人島、一種密室状態の無人島において一人ずつ殺されていって十人全部殺されちゃうのですよ。それって殺した人がいなくなっちゃうじゃんということに。そこにトリックがあるのですけどね。古典中の古典です。これはエルキュール・ポアロとか**ミス・マーブル**とかの探偵は出てきません。

これも有名だね、『**オリент急行の殺人**』(早川

書房)です。『オリент急行殺人事件』というタイトルで映画化されました。最近またリメイクされました。いわゆるトラベルミステリということにはなるのでしょうけど、実際は列車から外へ出ていないのです。列車好きはいいかもしれないけど、観光気分は味わえません。でも、やっぱりとびつきり意外な犯人が出てきます。ネタバレされちゃいますから、これも早めに読んでおいた方がいいと思いますよ。

クリスティーはもう全部中身が優れています。習志野高校の『高校生のための本格ミステリ入門』のホームページにもありますが、「クリスティー・ファンクラブおすすめ10冊」をご覧になって、ぜひ学校図書館に揃えてください。これぐらいは揃えてほしいなあと思っています。よく言えば全作揃えて欲しいなあ。今クリスティー文庫になって、100冊全部揃います。古典の基礎となる本ですので、図書館に揃えてくれたらうれしいなと思います。

クリスティーはイギリスの作家ですが、三大巨匠のうちの二人目がアメリカ人の**エラリー・クイーン**です。一番有名なのは『**Yの悲劇**』(東京創元社)。聞いたことあるかな。この作家は**フレデリック・ダネイ**と**マンフレッド・リー**という人と同士なのです。だから一人ではなく、二人の合作です。二人でたして**エラリー・クイーン**というペンネームです。まさに本格ミステリという形を作った人だと思います。

本格ミステリというときぐトリック、トリックと言いますが、エラリー・クイーンはトリックよりもロジック、つまり論理中心です。

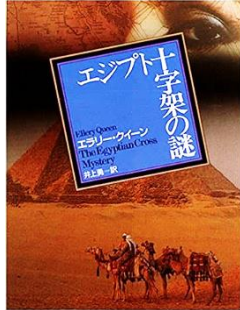
トリックとロジックの違いが何かっていうのを説明しますね。トリックは犯人だと思わせないために色々なことを犯人が捜査陣に仕掛けます。たとえばアリバイトリックとか密室トリックとか一人二役の変装とか、凶器を消すとかで、自分の犯罪をかわそうとすることです。ミステリ作品においてトリックを考えるのが作家の仕事ではあるけれど、トリックがもう使い果たされたらミステリは絶滅するじゃんというようなことも言



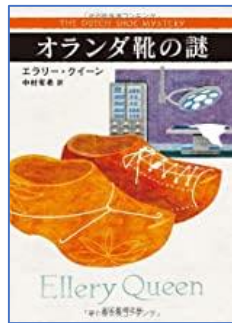
われてきました。

それに対してエラリー・クイーンはなぜ、それが犯人なのかという「その根拠をどう推理していくか」というところが中心なのです。これがロジックですね。

『エジプト十字架の謎(秘密)』(東京創元社)という作品があります。作中でヨードチンキの瓶が現場に残されて、それがなぜそこにあったかっていうことだけで、たった一人の犯人に行き着くのです。この論理の素晴らしさ。トリックじゃないのです。



『オランダ靴の謎(秘密)』(東京創元社)というものあって、現場に残された靴紐だけから一人の犯人を暴き出しちゃう。これがエラリー・クイーンが創り出した手法です。それまで、そこまで突き詰めて作品を作った作家はいないと思います。エラリー・クイーンは詳細なロジックを書いていくわけです。



国名シリーズって言われていますが、『エジプト十字架の謎(秘密)』『ギリシャ棺の謎(秘密)』(早川書房)など、最後に「謎」とか「秘密」で終わる一連の「国名シリーズ」が9冊ありまして、エラリー・クイーンの初期の作品です。これらはまさにパズル小説といえるほどです。そして、必ず「読者への挑戦状」というパートが出てきます。「ここまで、解決のために必要な手がかりはすべて示しました。皆さんは必ず真相に気づくでしょう。さあチャレンジしてくださいね。」というのが必ず入るのです。つまりある意味「遊び心」といいますか、そういう心を持っていた人ってということでマニアの世界では極めて評価が高い作家です。エラリー・クイーンが好きという人はいっぱいいるし、エラリー・クイーンの影響を受けた今の作家さんもういっぱいいます。

エラリー・クイーンは名探偵の名前もなんとエラリー・クイーンです。作家の名前と探偵の名前が同じ珍しいタイプなのです。

探偵の名前が違っている作品もあって、おそらく日本で最高傑作と言われているのが、『Xの悲劇』、『Yの悲劇』、『Zの悲劇』と『レーン最後の事件』(以上、東京創元社)の全4部作です。ドルリー・レーンという耳の聞こえないシェークスピア俳優さんが探偵です。このシリーズをエラリー・クイーンは二人でバーナビー・ロスという別の名前で書いています。二人が組んでいることを隠していて、バーナビー・ロスとエラリー・クイーンが同一人物であることは秘密にされていて、エラリー・クイーンがバーナビー・ロスに論戦を吹っ掛けるなんてことをわざと演じたりしています。それもトリックなのです。つまり世間の人には二人居ると思わせて、後で「実は二人で書いている一人の作家だったのですよ」と公表しました。今は、悲劇4部作の作家はエラリー・クイーン名義で日本では出ています。探偵エラリー・クイーンの作品より若干読みやすい本です。



ただエラリー・クイーンの難点はあまり面白くない点です。けれど、面白いという意味が違います。途中でドキドキするとか、ヒロインが捕まって殺されそうみたいなことを、わざわざ排除しているのですね。エラリー・クイーンは「私は、いわゆる一般でいう面白さに主眼に置きませんよ。あくまでも論理なのです、ロジックですよ。」と強い意志をもって推理物語を書いているのです。その潔さが逆にいいですね。

高校生が読んでいて結構ページを追うのはしんどいかもしれませんが、本日の私の講義で値打ちがわかったなら、「エラリー・クイーン、すげえ！」となります。こんな所から手掛かりを持ってきたのかとか、こんな論理展開とか、みんな見えていなくてこんな推理はできなかったよねと。これこそがエラリー・クイーンの価値なのです。エラリー・クイーンも学校図書館に置いてほしいです。これで高校生の知力は向上しますよ。

残り一人、これがディクスン・カーです。ジョン・ディクスン・カー、別名カーター・ディクスンです。アメリカの作家です。

私は、彼にはまりました。私にとって神です。ユーチューバーの話をしたときに言いましたね。この人のすべてが好きです。どれ読んでも面白いです。だけど面白くないって人も、いっぱいいます。これが不思議なのです。なぜ面白くないかは私には正直さっぱり理解できません、みんな面白いはずだと思いますから。

彼の作品の中で何から読んだらいいかというのは難しいです。名作といわれているまずこれから。

『三つの棺』(早川書房)。

恐ろしくよくできていますよ。二つの不可能犯罪が出てきます。鍵をかけられた部屋で人殺しがあったのに犯人は煙のように消え失せていない。それとは別に入り口



を見張られた袋小路の路地で、ある男が射殺されます。射殺されたのにそこに犯人はいません。トリックは明かせないので読んでください。恐ろしく複雑なやり方であり得ないことをあり得るように隠しているのです。複雑すぎて初心者にはあえて勧めないほうがいいかもしれない。ついて来られなくなるとつままないかも知れない。ディクスン・カーを読んで嫌いになられたらいやなので、本格ミステリを好きになってからディクスン・カーに行ってくれたら「すげえ」となってくれるかな。

『火刑法廷』(早川書房)、今は、これが一番という人が多いです。これも不可能犯罪ものですが、最後にびっくりしますよ。結構このやり方を踏襲して真似ている現代の作家さんがいるので、ほかの作品で先にこのトリックを読んだらああこれかってなってしまうとかわいそうだね。これはカーが発明した「驚くべきラスト」



です。驚きますよ、寝ながら読んでいたらひっくり返ります。そういう話です。

『ユダの窓』(早川書房)。本書は、カーター・ディクスンという名義で書かれて



います。これまでの三作の中では一番読みやすいです。これも密室で殺人が起こります。その謎を解く舞台はすべて法廷の中です。密室で男が意識を失って発見さ

れますが、そこには死体があるので、自動的にその男が犯人にされてしまいます。しかし、「その人は犯人じゃない」と確信しているヘンリー・メルヴェール卿というお茶目なおじいちゃん名探偵が、法廷で色々なことを言って、相手を言い負かして、最後に別の意外な真犯人を言い当ててしまうのです。そういう意味で読んでいて面白いです。お話しは初めから終わりまで法廷の中だけです。

カーといえば全部面白いのでこれ以外にもたくさんお勧めはあります。ディクスン・カーっていう作家がいるんだということを、ぜひ覚えていてもらって、学校図書館にディクスン・カーを入れてください。カーを揃えるのは難しいです。すぐ絶版になっちゃうの。油断すると前に出た本はマニアが探すので、もうそれこそすごい値段になっちゃいます。マニアはどうしても欲しくなっちゃうのですよ。カーの全ての本は日本語に翻訳されていますので、日本語で読むことができます。

学校図書館にはこの三人は基本かな。私の属する「SRの会」でも、この三人が基本です。Tシャツのデザインになっているというのは、そういうわけなのです。しかし、翻訳小説なのでやっぱり読みにくいですね。時代もいわば第二次世界大戦の前になってしまうともう時代感覚もちょっとずれますから、共感できないとか色々な面でやっぱり今の若い子が読むのはちょっと難しいでしょう。抵抗があるかもしれないけど、ここをぐり抜けたら、その後は彼らの残したものがどれだけすごいかわかるのです。

このあたりまでが、いわゆる本格ミステリの黄金期

です。

ミステリの拡散

謎解き以外を主題に、サスペンス、スリラー、ハードボイルドなどへ

本格ミステリの黄金時代の終わりは第二次世界大戦がだいたい終わるぐらい。きちんと終わったわけじゃないです。だけどこの頃からだんだん飽きられてきちゃうのです。本格ミステリというのは子どもっぽいとか、その時代の社会や人間の深刻な真実を描いていないとか、もっと起伏に富んだストーリー展開があったほうがよいとか、型にはまったタイプのものが多いとか、いわゆる英米の国々でだんだん飽きられて、多方面へ拡散して行きました。拡散の方向は、たとえば文学好みの人はそこから主人公の内面を描いたりする方にいきました。結末でビックリ驚かそうとしたり、巧妙なロジックへ神経が行かなくなったりしました。

そこで、「サスペンス」というジャンルがミステリの世界に出てきます。これは「主眼は緊張感」で、主人公がそこで犯罪に巻き込まれてどうしようという、本来ミステリでドキドキするような様を描いたものです。謎を解くという部分が希薄になったりもしました。これもミステリから出てきたものなので、一応ミステリと呼びますが、これは本格ミステリではないのですね。

また、「スリラー」とは、主人公が事件に巻き込まれて追われたりしながら、話の筋がハラハラドキドキの冒険の話になっていくという「主眼は話の展開」のミステリです。謎解きはどうでもよくて、最後に意外な犯人が出てくるタイプの話です。

それからアメリカで発達した「ハードボイルド」も戦後流行しました。ハードボイルドについて話しておきましょう。イメージとしてはバーボン飲んでいたり、名探偵が殴られたりしながら暗黒街で謎を解いていくというタイプの話で、これがアメリカで流行るのですね。ハードボイルド作家の代表格は、レイモンド・チャンドラーで、名探偵フィリップ・マーロウというのがまさにそういうタイプです。名探偵シャーロック・

ホームズの虫眼鏡を持つイメージではなくバーボン飲んでいるイメージという、まあ一つの定型像を作り上げたことは間違いないのですが、謎解きなどなく本格ミステリへのこだわりもないのです。私は好きでないで、私の守備範囲をはずれています。

英米においては、今や本格ミステリという言葉はありません。こだわっていないのです。あわよくば一発当てて、ハリウッド映画の原作にでも採用されたら大金持ちだぜというような動機で書いているような作家が多いです。だから確かに読んでみると面白いです。もうまさに映画を観ているみたいです。ハラハラドキドキして飽きさせないです。でもちょっと違うんだな。本格ミステリって売れないのに頑張っている世界なのです。読者はもうちょっとなんとか面白くできないかなと思うところがあるかもしれないけど、それやったら論理が破綻するのです。やせ我慢しながら書く世界なのです。このように、ミステリは範囲が広がって行ってしまいました。

本格ミステリの原点はやはりエドガー・アラン・ポーだと思います。ここで、もう一度本格ミステリの成り立ちを思い出してください。「まず謎があって、捜査をして、推理があってそして最後に解決され、解決した時に意外な犯人の正体も明かされる」ということでしたね。殺人が出てくればもうこれミステリでしょうとか、警察官が出てきたらミステリでしょうとか、もう守備範囲が広がり過ぎちゃっているところがあります。旧約聖書では人殺しの話が出てくるからといってすぐ旧約聖書もミステリでしょうとか、シェークスピアなんかも人を殺しまくりますからシェークスピアはミステリ作家でしょうとか、というふうに言えちゃう訳ですね。だけどそこまで広げちゃうと、私はもう、ミステリの守備範囲じゃないと思うのです。本格ミステリにこだわっているというのはそういうことなのですね。たとえば警察官が主人公の「ハコヅメ」(日本テレビ)というドラマがあったじゃないですか。主人公は永野芽郁と戸田恵梨香の先輩後輩の警察官です。二人で殺人事件を追ったりしているのでまあミステリですよ。ミステリですけど主題はそこじゃないです。新米の女警察官がどうやって成長していくかというところなんです。成長物語になっているのです。

本格ミステリじゃないんだけど、でもミステリになっちゃうのですよ。あれはミステリのジャンルとすれば警察小説ということになると思いますね。このようにミステリの守備範囲が広がりすぎちゃったのです。

そんな中でも、本来の本格ミステリの原型から、それないようにしたいとこだわったのは、日本人だけだと思います。日本ならではの。

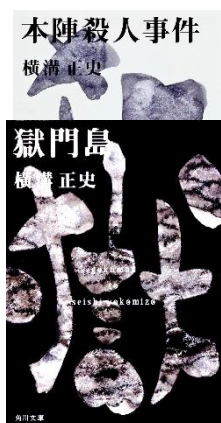
日本の本格ミステリ

横溝正史により、一気に世界レベルへ

それでは日本の本格ミステリに行きましょう。日本の本格ミステリが花開くのは戦後です。まさに世界の黄金期がちょうど終わった頃。戦中は、敵国の英米の文化を入れることは一切アウトの時代です。戦争に負けて本格ミステリ界にとって、「一気に花開く」となったのです。

横溝正史がその中心にいました。私が高校生の時読んで感動した、『八つ墓村』(角川書店)を書いたのが横溝正史です。この作家がおそらく日本で最初のちゃんとした本格ミステリ作家だと思いますね。それまで本格ミステリは基本的に翻訳ものであったし、江戸川乱歩が一生懸命紹介していたけど、実作でちゃんと書いた人はほとんどいなかったのではないかなと思います。日本の本格ミステリを、まさに世界レベルにしたのが横溝正史っていう作家です。

日本における初めての世界レベルは『本陣殺人事件』(角川書店)です。そして、戦後日本の最高傑作と言われる『獄門島』(角川書店)。名探偵金田一耕助が推理するシリーズ本の1冊です。今まで2回文春がやったファン投票で2回ともこれが1位ですね。横溝作品

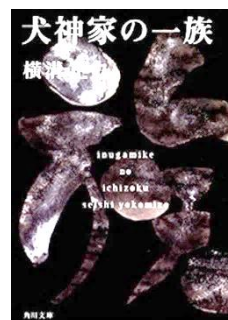


が一般的に有名になったのは『犬神家の一族』(角川書店)からです。横溝の基本はどこから来るかというと、私の愛してやまないディクスン・カーです。戦争中は敵性文学だから、ミステリは書かせてもらえなかった、禁止ですよ。だから、横溝は原文で英米のミステリや、ディクスン・カーを読んでこんなすごいのあるのかとびっくりしたわけです。不可能なことを可能にしたり、怪談話やホラーとからませるのが、カーの作風です。こんなおどろおどろしい話を日本風にできないかなと、横溝は考えていたわけです。あるいは農村の祟りだとか、農村の狭い人間関係の中のドロドロしたものの中から事件が起るということはどうだろうかと。そんな風に発想して本にしたのです。そして、なぜか20年経った時に大ベストセラーになっちゃったっていうのが横溝正史の作品です。

横溝のほかに高木彬光(たかぎ あきみつ)もこの時代の本格ミステリの優れた書き手です。代表作は『刺青(しせい)殺人事件』(光文社)。刺青とは入れ墨という意味ですね。他に『人形はなぜ殺される』(角川書店)がまさにこの時代の日本を代表する本格ミステリです。高木彬光は無茶苦茶当たり外れがあるので勧めたものだけ読んでください。

鮎川哲也も、この時代の作家です。

これで日本のミステリが一気に栄えるかと思われました。ところが日本でも、本格ミステリはすぐに飽きられて、昭和30年代高度成長期になると、もうこんな子どもっぽい謎解きとかやってるのは文学として情けないんだという風潮が出てきました。



「社会派」に駆逐された日本の本格ミステリ 松本清張の登場で、衰退へ

その後を一気に進めたのが松本清張です。『点と線』(新潮社)という有名な本があります。松本清張作品には本格ミステリもあるにはあるのですが、彼は現実の世界を書きます。現実の世界を描くので、名探偵が出てきません。名探偵でなく現実だから警察官です。あるいは弁護士とか新聞記者ぐらいまで。あとは、たまたま事件に巻き込まれて解決する人は一回限りしか出てこない一般人。松本清張は現実の社会の中で起こったこと、たとえばある企業のドロドロした不正に巻き込まれて殺されちゃった人物を刑事が靴底をすり減らして解決するといったような、今日の日本の不条理な社会の現実とか、人間の持つ闇なんかを書ききって一気に人気が出ました。このように作品は、その時代の現実を投影しており、松本清張を中心とした現実に即した作品を書くミステリのタイプは「社会派」と名付けられました。松本清張が人気になると、松本清張のようなものがまともなんだという雰囲気が出てきて、逆に高木彬光とか横溝正史とか、こんな恥ずかしいものを書いていてということで書けなくなっちゃって、彼らは発表の場を失ったり、スタイルを変えなくてはならなくなったりしました。そんな中でも、社会派の型を借りて本格ミステリを書いた人もいますが、しかし、現実味がないのでだんだんと書かれなくなってしまいました。



日本の本格ミステリの復活 綾辻行人により新本格ブームが到来 世界最高レベルを維持

そんな逆風の中、実は日本の本格ミステリは復活するのです。その大きな転機になったのは1987年、綾辻行人(あやつじ ゆきと)の『十角館の殺人』(講談社)です。高校生の君たちとかなり近い

時代になってくると思います。この人は京大のミステリサークル出身で、まさに学生の時の作品です。古典のクリスティもエラリー・クイーンもディクソン・カーもみんなちゃんとわかっている綾辻行人が本格ミステリの世界で書いた



本です。これまた話としてはそう面白くない。特に人物がダメ。みんな平板だし、生き生きとした人間は出てこないです。けれど謎解きに「ええっ、そういうこと！」ってびっくりします。本来の本格ミステリの面白さを持っているのですね。その当時の日本の本格ミステリ界を引っ張っていた島田荘司さんという人が熱い推薦文をつけて世に送り出したのですが、文壇からはバッシングを受けます。「松本清張先生が、やっと日本のミステリを文学のレベルに高めてくださったのに、こんな学生のへたな文章で薄っぺらな人間しか描けないものを認めることはできない」と批判されたんです。

けれど出してみたら、売れたのですよ。そしてこれがブームとなりまして、この後に続く作家たちがいて、世の中で続々と売れるようになっていき、現在に至ります。これが「新本格」ブームです。世界中を眺めても、現在、日本はまさに本格ミステリを中心なんじゃないかなと思うぐらい。もう英米には存在しないのですね。一部のマニアみたいな人が書いてみたり、あるいは大家がたまに書いてみようかなという感じです。一方、日本ではちゃんと真面目に規則を守って本格ミステリの中でやろうとする人たちがいて、しかもその人たちが売れている。やっぱり日本人はオタクなんだろうね。たとえば漫画とかアニメなんて、子どもが読むものでしょといって欧米人はバカにしていたんだけど、日本人はまじめにこだわり続けたらなぜかものすごく価値のあるものになった。私は、本格ミステリも同じだと思うのです。今マニアは、日本の本格ミステリはおそらく世界最高レベルだと思っています。だから、「本格ミステリを読みたければ日本語を覚え」というのは、世界の愛好家たちの合言葉です。日本語で書かれたも

のを読めなければ一番いいものを読めないということ
とでね。まだまだ外国語に翻訳される日本の本格ミ
ステリは少ないので、私たち日本人が一番いい環
境にいるのかなと思います。

本格ミステリの評価軸

トリックの独創性 ・ロジックの緻密さ、
結末の意外性 ・フェアプレイ・
ミスディレクションの巧みさ ・遊び心

最後に本格ミステリを読む上での、評価軸につ
いてお話しします。実際に本格ミステリは油断する
とどんどん姿を消していってしまいます。パターンが
同じなのでそこから何かちょっと変えたいと思うと
段々ずれていきますね。本格ミステリが守る範囲が
どこなのかということを意識していないと、本格ミステ
リという概念が消えてしまうのです。日本は本格ミ
ステリ作家クラブというのを作り、「本格ミステリ大賞」と
いう賞も毎年出していて、ジャンルを守ろうとしてい
る世界で唯一の国です。そうはいつでも、本格ミ
ステリというものの範囲が広がったり変わっていつたり
するのは、発展だからいいことです。けれど、本格ミ
ステリの核になるものだけは忘れちゃいかんぜよと
守っております。

評価軸について説明しましょう。「**トリックの独創
性**」。これは昔から言われています。しかし実際には
前例のないトリックは、もはやなかなか思いつくも
のじゃありませんので、誰かの似たようなトリックで書
いています。エラリー・クイーンの時に話したように、
トリックとしては前例があるけれども論理・ロジックが
違えば独創性があるものになります。「**ロジックの精
密さ**」とは別ですからね。ここはまだまだ手が出せる
領域です。

次いで「**結末の意外性**」はミステリの楽しさの一つで
す。こんなこととは思わなかったという結末の名作た
ちが、今でもいっぱい生み出されていますよ。

そして次の評価軸が「**フェアプレイ**」です。これは
本格ミステリにとって、とても大事です。フェアプレイ
とは、「ルール違反をしませんよ」ということです。ル
ール違反をしたらいくらでも書けちゃうのですよ。た

とえば先にいい人だと書いというて実はそれ嘘でした
とも書けちゃうわけですね。確かに読者はビックリす
るけど、それってズルでしょ。彼はいい人であると三
人称あるいは地の文で、天からの視点のように書い
てあれば、それは事実であると考えます。三人称で
書いているものは絶対嘘ついちやいけないというの
がミステリの大原則です。ただし「私は、彼はいい人
だと思う。」と、かぎかつこの中で発言する部分は、
一人称だから、すべてその人が思っていることなら
ば事実反していてもいいです。でも三人称でや
ってはダメなんです。また、男なのに女のふりをした
人物を読者に女だと思わせようするとき、「彼女」と
書いたら嘘をついていることになるので、反則です。
だからといって、「彼」と書いてしまったら、簡単にば
れてしまうから、「その人物」というふうに最低でも嘘
はつかずに書いてあげればいいのです。その辺のル
ールがちゃんとわかって書いているのかいないの
か。とにかく、ルールを守って書けていなければ「こ
れはフェアじゃない」ということです。本格ミステリと
してはランクが下がります。

そうすると先ほどの結末の意外性とフェアプレイ、実
はこれ反比例するのですよ。手がかりをいっぱい書
けばバレバレになっちゃうし犯人も見えてきちゃうわ
けです。そうすると意外じゃなくなっちゃうのですよ
ね。意外性を出そうと思ったら逆に手がかりを少なく
書き、嘘をつきたくなっちゃうわけです。

そこでじゃあどうするかというと、それが**ミスディ
レクション**という技法です。このミスディレクションとい
うのは奇術業界の用語です。見え見えのことをしてい
て、逆の意味にとらせちゃうのです。たとえば奇術
師がよくやるのは、ハンカチを出したからなんかネ
タを出すんじゃないかなと思うわけです。ところが、
ハンカチを出して汗を拭いただけでしまってしまう。
なんだネタを出したんじゃないのかと思いますよね。
でも、ハンカチをしまったときに実はネタを仕込む
んです。ミステリでいえば、作家は、犯人がこの人し
かないという手がかりを堂々とばんばん書く。でも
読者は作者のミスディレクションにのせられて、犯人
はその人だと気がつかないで、全然違う意味に取
ってしまうのです。これがミスディレクションです。そ

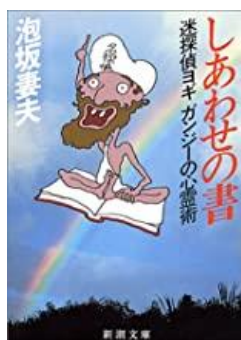
ういう書き方さえすればね、トリックがオリジナルでなくても充分名作が書けるのです。

それをした代表格が**泡坂妻夫**という人です。

「新本格」時代に向う流れを作った作家ですが、『**亜愛一郎の狼狽**』(あ あいいちろうのろうばい 東京創元社)が一番お勧めです。**亜愛一郎**は名探偵の名前です。この人の作品を読むとミスディレクションってとっても大事だなと思います。堂々と書いてあるのだけどみんな違う意味だと思っちゃうので、愛一郎が真相をいうと「ええっ」と思うのです。テクニックが抜群です。泡坂妻夫自身がアマチュアの奇術師だからミスディレクションには熟達しているのです。私はこれ読んで本格ミステリは不滅だなと実感しました。トリックがなくなったら終わりはずっといわれ続けてきたのが、トリックじゃないよ、隠し方だよと知ってね。まだまだ発展する余地があると思いました。おそらく未来永遠大丈夫とね。そういう風に思わせてくれた作家です。だからこのミスディレクションってフェアプレイにはとっても必要な技法なんです。

そして最後の評価軸に「遊び心(稚気)」を挙げましょう。やっぱり本格ミステリはこれが大事なのです。先ほどいったエラリー・クイーンは、初期作品のタイトルには必ず国の名前を入れて、『**エジプト十字架の謎(秘密)**』、『**オランダ靴の謎(秘密)**』などと揃えて遊んでいるわけですね。

そういう精神というのは実は大事で、先ほどの泡坂妻夫は遊び心でも代表格の人です。一番すごいのは『**しあわせの書—迷探偵ヨギ ガンジーの心霊術**』(新潮社)。これは遊び心の塊で、こんなものを書くためにどれほど努力したのかなと思うほどの大変なトリックが、全編にわたって仕掛けてあります。おそらくむちゃくちゃなエネルギーを使っているでしょ



う。それがわかった時に、この人すごいなと感動しました。けれど、この仕掛けのせいでどうなったかというと、話としてはむしろ面白くなっているのです。だからあんまり売れていません。「遊び心」を優先して売れないことをわざとするのは、作家としてはバカなことかもしれませんが、私はそういう人を応援したいのです。トリックはネタバレになってしまうので書けません。彼は、他にも『**喜劇悲奇劇**』(東京創元社)でおおいに遊んでいます。タイトルの「きげきひきげき」、これは反対からでも同じ言葉になる回文です。また本の第一章一行目に「台風とうとう吹いた」とあります。「たいふうとうとうふいた」、反対から読んで



も同じでしょう。そのように回文にこだわり尽くした本です。だからといって面白くなるわけじゃないです。面白くなるわけじゃないところに頑張っちゃうことは、結構本格ミステリには大事なのですよ。売れる売れないだけで書いたら意味ないのです。

こんな中で近年頑張っている人が**乾くるみ**さんという作家です。比較的新しい本で『**ジグソーパズル48**』(双葉社)という本があります。この本はAKB48に捧げています。皆さんにも読んでほしいので少しネタをばらしますね。章は全部で7つあるのですが、タイトルには全部数字が入ったAKBの楽曲名になってい



て、「ラッキーセブン」とか「ギブミーファイブ」とか、それでこの数を合計すると48になるのです。そして、たとえば「ラッキーセブン」だったら、7人女子高生が出てきます。そしてその7人の名前が全部実在のAKB48のメンバーの「アナグラム」、綴りかえになっているのです。たとえば駒田淳恵(こまだ あつえ)とは前田敦子(まえだ あつこ)です。入江若菜(いりえわか)は川栄李奈(かわえい りな)です。私は読んでいる途中で名前アナグラムに気づい

て、48人分書き抜いて、全部つきとめました。本来の謎解きとは別な興奮がありました。

でも、こんな変なことをしているから、めちゃくちゃ変な名前ばかりになってしまっただけでとっても読みにくい。ネット上では文句をいっている人もいました。何でそんな変な名前ばかりで書くだとってね。だから逆にいうと評判を落としちゃっているわけです。乾くるみは、アナグラムのことほどこにも書いていません。気づいてもらえなければ、ただの無駄な努力なわけです。でもこのように作品が少々面白くなっても、バカなことでもこだわっているところがある、本格ミステリの遊び心なのです。

最後に本格ミステリと一般文学の目指すものの違いについて、『**獺の耳たぶ**』(幻冬舎)という本を



取り上げて解説してみたいと思います。芦沢央(あしざわ よう)という作家が書いている本です。この人は本格ミステリもちゃんと書ける人ですが、この本は本格ミステリ作品ではありません。

話はとんでもないもので、ある女が妊娠して子どもを出産するのですが、わが子をたまたま同じ日に生まれた別の赤ちゃんとはわざと取り替えちゃう。おそらく、病院の手違いで入れ違ったということはあっても、意図的というのは現実にはないと思います。もしかすると子育てがやりたくないから捨てちゃう親はいるでしょうね。あるいは人の子が欲しくなっちゃって連れてきちゃう人もいるでしょう。けれどこの主人公はわざと自分の子を同じ日に生まれた別の赤ちゃんとはわざと取り替える。別の子を連れ帰ってその子をちゃんと大事に可愛がって育てるのです。そして取り替えたことを言い出せずにずるずると4歳まで行っちゃう。そんなバカな話なんです。母親が自分の子をわざと取り替えて何のメリットがあるのだろうか。何もないと思いますよね。それを作者は、次のように描きます。この母親は頭はいいのに、もう一人の明るく保育士をしている母親と比べて、子育てに

自信が持てず、私なんかに育てられるはずがないというコンプレックスを抱いてしまうのです。それで赤ちゃんを取り替えてしまうのです。

やっぱり確かにそういう気持ちであるのかなと思わせるように書いてあります。これはミステリのやり方じゃなくて文学のやり方なのです。小説の中ではあり得るかもと思わされてしまうのです。妊婦ってやっぱりいろんなストレスを抱えていたり、その時ふっと魔がさしたみたいに自分の子でも取り換えることがあるのだなあと思わせるだけの力があるのです。でも、本格ミステリはそっちには行きません。本格ミステリだったら、それもトリックに使っちゃう。だからある意味、文学としての価値だけでその小説の値打ちを計っていったら、本格ミステリなんかやっぱりバカバカしいのです。しかし、バカバカしいからといって価値のないことにはならなくて、本格ミステリには本格ミステリというジャンル特有の味わいがあるのです。

本日、こうやってお話する時間をいただいたのは、一見バカバカしく、あるいは文学的にいったら価値のないことをやっているように見えても、独自のこだわりを持つ価値観で楽しむ本格ミステリの世界というものがあるということを理解していただきたいと思ったからです。

とてもいい機会となりました。理解してくれたかな。

お勧めの 現代の本格ミステリ作家

最後に私のお勧め作家を紹介しましょう。現代の作家たちで、君たちが読んでも大丈夫な人です。

一人目が、**大山誠一郎**。お勧めは『**赤い博物館**』(文藝春秋)。この作家は、私にはとにかく何読んでも面白くって一番好きな作家です。大山誠一郎は私の理想の本格ミステリ作家です。2年に一冊しか書かないので冊数は少ないです。





二人目に青崎有吾。代表作は『体育館の殺人』とか『水族館の殺人』とか『図書館の殺人』(ともに東京創元社)とかね。どれも高校が舞台なので読みやすい。ものすごくロジック中心の現代作家です。読みやすいし、学校図書館へ入れてもらってもいいのではないかなと思います。

そして最後にもう一人、早坂吝(はやさか やぶさか)。これはどうだろうね。デビュー作『〇〇〇〇〇〇〇〇殺人事件』(講談社)、これは高校に置いてもらうには申し訳ないような不謹慎な本です。主人公の名探偵が援助交際している高校生という、ろくでもない話なのですが、深刻なところは一つありません。ただ間違いないく結末を読んだらひっくり返ると思います。当初からちゃんとそれが成立するように書いてあるのだけど、誰も気づかないと思います。びっくり仰天というものを書ける人です。本格ミステリが好きになってきたら読んでみたらいいのかなと思って紹介させていただきます。



本日は、本格ミステリの魅力を語らせてもらいました。

(終了)



↑ 午前、話に聞き入る生徒たち

↓ 午後、鮎川哲也作「達也が嗤う」を読んでからの発表



YouTube “jdctaku”サイトは、
https://www.youtube.com/results?search_query=jdctaku You Tube
 検索エンジン Google でも yahoo japan
 でも『jdctaku』と検索

SR の会
<http://sealedroom.blog.jp/archives/51700614.html>



令和4年7月22日に開催した、千葉県高等学校教育研究会 第5地区「夏の図書委員交流会」にておこなわれた講座の記録です。

＊転写・転載は、自由に行ってください。

＊参考 to 本の画像を入れましたが、出版社が違 to 作品もいろいろあります。

お問 to 合わせは、令和4年度担当校、習志野市立習志野高等学校 図書館司書・菊地までお願いします。